

## 自由記載項目

### III 義務年限内の勤務について

5) 義務年限内勤務に関して、指摘する点、意見等 (29/89 人 : 32.6%)

① 肯定的内容 関係性、意義

② 否定的内容 教育・研修、知識・技術、支援体制、キャリアパス、関係団体、家庭・生活

9) 義務年限内に勤務したへき地勤務に関して、指摘する点、意見等 (19/89 人 : 21.3%)

① 肯定的内容 自主性、多様性、自由、意義

② 否定的内容 教育・研修、知識・技術、支援体制、キャリアパス、関係団体、家庭・生活  
待遇・処遇、緊張感

### IV 医療提供体制及び医学教育について

5) 地域枠の入試制度に関して、指摘する点、意見等 (34/89 人 : 38.2%)

① 肯定的内容 医師数の確保、同好の志

② 否定的内容 自治医大卒業生との差、地域枠学生の質、不信感、地元大学志向、

9) 総合診療医について指摘する点、意見等 (21/89 人 : 23.6%)

① 肯定的内容 幅広い知識・技術、時代のニーズ、多様な疾患への対応

② 否定的内容 教育・研修、総合診療医の定義、質

### V 自治医科大学第1期生として

3) 自治医科大学に関する12項目についての自由記載 (37/89 人 : 41.6%)

4) 「自治医科大学を卒業して良かったこと」についての自由記載 (61/89 人 : 68.5%)

5) 「自治医科大学を卒業して良くなかったこと」についての自由記載 (33/89 人 : 37.1%)

6) 自治医科大学に伝えたいことについての自由記載 (50/89 人 : 56.2%)

### VI 国・都道府県、地域医療振興協会に取り組んで欲しいことについての自由記載 (なんでも)

(40/89 人 : 44.9%)

### Ⅲ 義務年限内の勤務について

#### 5) 義務年限内勤務に関して、指摘する点、意見等

##### 【肯定的内容】

- ・ 苦勞したが良い思い出である
- ・ 得がたい貴重な体験となっている
- ・ 非常に重要だった
- ・ 複雑性を抱える患者を診る機会であり重要
- ・ 県が自主性を尊重してくれたことに感謝
- ・ 地元大学や自治体の協力を得て、希望する診療科に転身できてラッキーでした。
- ・ 比較的不自由なく勤務できた

##### 【否定的内容】

- ・ 卒後の教育システムがしっかりしていなかった頃なので、医師としての資質の醸成に不安があった
- ・ すぐに戦力として動かなければいけない状態で、知識・技術を伴わない点に悩んだ
- ・ 研修、実践を”3年くらい”上乘せして、内容、中味を充実してほしかった。
- ・ 希望する多科ローテーションができなかった（6ヶ月間4科のローテーションにとどまった）
- ・ 8年目までは自治医大からの支援は全くなかった
- ・ 地元医大と県庁にすべてお任せで、うまく行かないケースが出てきている。今後は不安。
- ・ 地元の医局に頼らずに代診医や指導医が存在すればよかった
- ・ 義務年限後の進路は未知、自治医科大学の支援ほぼなし、地元大学の支援もなし。先輩 DR の個人的サポートに感謝。
- ・ どんな医師になれるのか将来に対する不安
- ・ 勤務地に関する相談が全くできなかった
- ・ 相談相手が居なかった。全て自分で考え、悩み、行動するしかなかった。
- ・ 僻地勤務の定義が曖昧で診療科により差（不公平感？）が出てしまう
- ・ 県医師会の自治医大関連病院進出反対の影響を受け大変だった
- ・ 当院には全国から総合医を志向する医師が集るが、残念ながらモチベーションは他大学卒業生の方が高い
- ・ 今だから「良かった」と言えるが、卒業してしばらくは絶望の日々だった
- ・ 研修病院とへき地診療所の診療圏域が異なることから、患者の紹介に困惑
- ・ 家族との時間がほとんどとれずに残念
- ・ 村役場との交渉事が若い医師には困難だった
- ・ 頻回の転勤・転居で落ち着かなかった

##### 【その他】

- ・ 妻の同意と理解が大切
- ・ 短絡的ではなく長期的に考えるべき
- ・ 「こんなもんだ」
- ・ インフルにり患しても仕事を継続していた。コロナで自宅待機の現在と隔世の感。
- ・ 行政に勤務しても臨床経験も積むことを推奨したい

### Ⅲ 義務年限内の勤務について

#### 9) 義務年限内に勤務したへき地勤務に関して、指摘する点、意見等

##### 【肯定的内容】

- ・ へき地勤務は楽しかった
- ・ 地元自治体の対応がよかった (鈴木啓二)
- ・ 地元出身のベテラン看護師がいてくれたため、往診や訪問診療が非常にやりやすかった

##### 【否定的内容】

- ・ 自治医科大学はへき地のことを考えていない
- ・ 多忙で、重症の入院患者を担当することが多かった。体力の限界を越えていた。サービス残業だった。パワーハラスメントもあり、赴任して2か月で退職する決心がつき義務年限内6年目で辞任。
- ・ 1期生であったこともあるが全部間に合わせという感じ。地域が自治医大を知らなかった。
- ・ 人的支援体制、情報支援、地域医療のバックアップ体制等、苦労が多かった。
- ・ わずか1年間の診療所勤務であったが、長期化した場合は子供の教育、自分の研修などが問題になる。知識はインターネット等でカバーできるかもしれないが、実地は難しい。
- ・ 医局関連以外の派遣先では、大学の支援を得るのが困難であった
- ・ 家族との時間がほとんどなかったのは残念
- ・ 外科医だが9年間で外科勤務は4年半程。10年目にとっても外科医としては勤務不可。
- ・ 義務年限内は行き当たりばったりで、穴埋めのコマとして派遣された印象がある。「地域医療構想調整会議」は、現実的かつ喫緊の課題を浮き彫りにして問題解決する場には程遠い。県の当事者意識のレベルの低さは、この40年余り何ら変わっていない。
- ・ 常に緊張していて家族にはサービスできないことが多かった。家族は小生とは別の場所、時間帯で楽しめていたようで、「家に居る」ことで安心だったと思う
- ・ 診療所勤務は前任地より給与が大幅に減り(当直代などなし)、夜間の急患対応、(観光地であり宿泊客の対応)など365日、24時間の勤務態勢であった。

##### 【その他】

- ・ 卒業生の継続配置は重要
- ・ 都道府県の担当と卒業生との連携が大切
- ・ 多忙時の代替とか自治医科大学の支援が必要。
- ・ 医者のみではなく、パラメディカルと一緒にチームでへき地勤務できる支援体制
- ・ 季節的レジャー客の増加と救急対応は応援してあげてください。
- ・ 必要な実力をつけてから僻地へ行く研修の充実と延長を要すると思う
- ・ 行政に勤務すると臨床の場から離れることを余儀なくされたが、臨床経験も積ませることを推奨したい

#### IV 医療提供体制及び医学教育について

##### 5) 地域枠の入試制度に関して、指摘する点、意見等

###### 【肯定的内容】

- ・ 当県では医師数が絶対的に不足しているので地域に残る医師数が増加することは望ましい。
- ・ 地域枠の学生さんはまじめに当県の医療を考えているようにみえます。
- ・ 地域医療に興味をもってくれる学生が、増えることは良いことだと思う。

###### 【否定的内容】

- ・ 学生、教員による差別が生まれている
- ・ へき地医療に対する大変の理解が乏しい
- ・ 地域枠の人たちがまとまることができない
- ・ 卒業する頃には地域医療と選択することはなくなっている
- ・ 専門医指向、修学資金の返還は今後ますます増えるだろう
- ・ 合格点数の下位から地域枠を選別するのでなく、最初から”普通枠”か”地域枠”を希望してもらったほうが良い。国公立大か自治医大の選択に課さないやり方がベター
- ・ 地域枠より新設医大の方が完全に地域医療に貢献している。地域枠のメリットは全く認められない。大学周辺にはやがて今後5~6年で開業医が増加すると思われる。
- ・ 親の地位や権威（医師会会長、顧問弁護士（その大学の））により、センター試験の成績がそんなに良くななくても合格できている（不公平感を感じる）。
- ・ 感覚的に有意義ではないと思っている。
- ・ 質の担保には改善の余地がある。
- ・ 国の方針で地域枠が減少することが心配される。
- ・ 自治医大医師と地域枠医師の扱いに差が有る。
- ・ 自治医大卒業生との棲み分けが心配。自治医大不要論も出かねない？
- ・ 自治医大入学希望者とバッティングすることから、自治医大入学適者の減ること。
- ・ 奨学金など経済的支援があり、社会人が医師を目指すには魅力のある制度であるが、義務は二の次となっている印象。
- ・ 地元大学の人員確保に利していると感じる。
- ・ 地域医療に熱意のある医師が少ない（大学の教育に問題ありか）
- ・ 地域枠で入学した学生は、そうではない学生と混在するため、年々使命感が、うすれていく可能性がある。
- ・ 各都道府県の地域医療に貢献できるかどうかはなはだ疑問
- ・ 地域枠の方が入りやすいので、使命感のない人がとりあえず合格しやすい。やめる人が多いのでは？
- ・ へき地の医療には貢献していないようだ。（地元自治体には残っているが、市中病院に多い）
- ・ 地域枠医師に対する道の負担は 1200 万円ほどであり自治医科大学の半分以下であるが、国公立大学のため学費他が安く、彼らは毎月 12 万円の生活費が支援されていると聞く。さらに、当地域では都市部を除いた地方の病院に勤務すれば僻地勤務として扱われ、診療科の制限もなく Minor の診療科を選べば都市部の病院のみで良いとされている。例えば、全国でも有名な 500 床規模の A 病院の例だが、大学と A 病院勤務だけで Duty を終える地域枠医師もいる。自治医大卒と違い、地方に勤務するのはほんの一握りに過ぎない。

全く税金の無駄使いと思うが、国民はこの真実を知らない。

- ・ 地域枠出身医師は、地元医学部の人員増に寄与することが大きく、へき地医療の現場はこれまで同様自治医大卒業生医師に依存している現状。自治医大卒業医師にとっては好ましいことではない。
- ・ 地域枠入学の学生と、その他の学生との線引きが曖昧で使命感が育ちにくいように感じる。
- ・ 地域枠医師の募集が一般的になれば自治医大の役割は少なくなる。
- ・ 地元大学の医学部卒業生が県外に出ることの抑制にはなっていると思われるが、へき地医療を支える医師数が増えることにはなっていない。
- ・ 地元大学の医局で専門医とする策が優先し、総合診療をしようとする若い力をそいでいる。
- ・ 当県医大地域枠卒業生の義務年限内勤務医療機関は地域公立病院までと聞いている。自治医大と同様、診療所まで含め検討願いたい。
- ・ 廃止すべきかと・・・。
- ・ 本当に医療過疎地域の医療に役立っているのか疑問。県職員ではないため、勤務病院の選択がかなりゆるい。

#### **【その他】**

- ・ 卒業後は自治医大卒業生と同じ方向性でやってくれたらよいのでは…。
- ・ 地元の県出身者は地元の県で働く医師になることが多いと考える
- ・ 離脱者数などを公表すべき

#### IV 医療提供体制及び医学教育について

##### 9) 総合診療医について指摘する点、意見等

###### 【肯定的内容】

- ・ 総合診療医について良くない点はない
- ・ 今後、発展すべき領域
- ・ 症状が出揃わない状態で、“豊富な鑑別診断名”（よく勉強して日頃から網をはっておく）の中から鑑別診断を行い、患者のフォロー、検査、治療、専門医への紹介など素早く行える点が総合診療医の魅力
- ・ 都市部の病院勤務と、地方の診療所勤務の総合診療医の違いはあるが、高齢社会のなかで総合医の役割は診療の質、医業経営上も極めて有用である。
- ・ 複数の疾患がある患者を総合病院に紹介すると、紹介した科に関係した疾患だけに対応し、その他の疾患についてはそのまま帰ってくるのがしばしばある。複数の疾患がある患者さんの場合は、総合診療医が担当し、病院内で調整して頂けるとありがたい。

###### 【否定的内容】

- ・ このままでは衰退の一途。
- ・ 総合診療医としての後期研修を選択する医師があまりにも少なすぎる。現在地域で開業している医師で「地域包括診療料」を算定している医師は極めて少ない。今後、多死社会で求められる地域の「かかりつけ医」はまさに「地域包括診療料」の算定に耐えられる総合診療医である。
- ・ 高密度に養成するための研修の場と実力アップのチャンスが不足している。同年度卒業の専門医志向と同僚になった場合、オーブン指導者としては均等に学ばせる必要をみとめてもウェイトが異なるらしい。??
- ・ 専門との関連付けが難しい
- ・ 専門医制度の中で位置づけが不明確。サブスペに繋がらない！
- ・ 優劣の差が激しすぎる。優秀な医師も居るが、そうで無い医師が多すぎる。診療科としての歴史が浅く、研修システムが確立していないためではなかろうか？ しかし、内科や外科の専門医をきちんと取得した後に、総診になった医師には優秀な人が多い。個人的には、総合診療医の資格は、他の専門医をきちんと取得した後に取得させるようにすべきではないかと考える。また、医局という組織の中で育てられた医師が少ないためか、彼らにとって最も重要と思われる人間性や協調性を欠いた医師も目立つ。地方にはこのような医師が吹きだまりのように集まってくるのは残念。
- ・ 若い時はある程度の専門性を持っていた方が、その後の医師人生にとっては有用。経験を積んだ後に総合的な視点を持って全人的医療を行った方がよいのではないか？
- ・ 総合診療を具体的に地域で実践する人をいまだ知らないなのでその必要性を論ずることができない

###### 【その他】

- ・ 総合的に医療を体験したことを人生の後半は活かして、他分野（経済界、産業界、環境界、芸術界、マスコミ）等で幅広く活躍できる能力を一期生は兼ね備えているので60才過ぎたからこそできる活動を期待する
- ・ 協会が目指す総合診療医を多数育成してほしい。
- ・ 自分の守備範囲がわかり、できることとできないことを判断し、自信がなければ、優先順位をつけて専門医に紹介すると返事（診断、治療）が返ってくるので大変勉強になり、少しずつ進歩出来ると思う。
- ・ 実際のところ総合診療医の定義がよくわからない。総合診療医の定義が議論する人の立場で乖離しているこ

とがある。

- ・ 総合診療医の医師の中での評価が高くなる必要がある

## V 自治医科大学第1期生として

### 3) 自治医科大学に関する12項目についての自由記載

#### 【肯定的内容】

- ・ 様々な地域の出身でおもしろかった。
- ・ 大学にはさまざまな運動施設があり楽しかった。
- ・ 出身県に帰るということで都道府県選抜は必要だし義務年限の設定により必要最小限の貢献と考えられる。
- ・ 苦勞して合格できたことは宝物です
- ・ おかげ様で有意義な大学生活でした
- ・ すべてが新鮮（建物、カリキュラム、全寮制）であり、親身になって対応してくれる教師陣、優秀で個性の強い同級生達。有意義でした
- ・ 先輩がいない自由な環境でしたからね、のびのびしていました
- ・ 一期生として自治医科大学に入学出来たことは、私の人生にとって大変名誉なことであり、全てのことに感謝したい
- ・ 運動設備がよかった。教員と触れ合いが多かった。
- ・ 学びやすい環境で6年間過ごせた。立派すぎる理念、ふさわしい設備、教育内容は自分にはもったいなかった。もう少し偏差値の低い平凡な大学で十分でした。
- ・ 学生時代には不自由な生活環境に不満もあったが、現時点では良い経験だった
- ・ 学生時代は1日中～年中、同じ顔ばかりで変化に乏しく全寮制を苦痛にかんじる時もあったが、40年以上経過し、振りかえてみると非常になつかしい思い出
- ・ 義務年限を終了し、大学教員として9年間勤務した。学生を教育する立場になって初めて、自分が学んだ環境、カリキュラム、そして教員の素晴らしさを痛感した。
- ・ 教員のみなさんは、へき地医療を知らないが、それを知ろうとする努力をし、興味を示してくれた。大きな力になった。
- ・ 自治医大での学生生活は有意義だった。勉学は駄目だったけど全寮制ですばらしい同級生、後輩ともめぐり合えたし、現在の生き方にも影響している
- ・ 講師、教員には常に熱意を感じられた。その熱意が教育効果を充実させていたと思われる
- ・ 講師陣もすばらしかったし、設備のすばらしかった。また一期生皆一つの目標（へき地医療）があったので、とてもまとまりがあった
- ・ 自治医科大学は自分にとって最高の大学でした。今日の私の豊かな人生の礎を築いてくれました。感謝の気持ちで一杯
- ・ 自治医科大学以外の大学と比較することができないが、総じて自分の中では満足している
- ・ 自治医大で過ごしたことは誇りであり、感謝しかありません
- ・ 自治医大の全寮制は機能したと思う。また栃木に所在したことも有意義だったと思う。
- ・ 同級生とのつながりは深くなった
- ・ 充実した学生生活を過ごせた
- ・ 全体としてとてもよく考えられたシステム、体制だったと思う
- ・ 全寮制は良かったが、最も良かったのは大学1年の時に皆で事務局と話し合って”自由（それなりの）”を獲



得したこと！

- ・ 大学時代は懐かしく、本当に良い思い出。教師陣も設備も申し分なかった。また、全寮制は他大学には無いシステムであり、一生涯にわたり一体感を醸成するという、とても意義あるものだった
- ・ 大学生活そのものは非常に充実し良かった。大学職員、同級生との意見交換はその後の小生の人生に大いに役立っている
- ・ 全寮制、教育制度は国立大学には無いものであった
- ・ 勉強するのに良かったというより、色々な変わった先生+周辺の方々に巡り会えたのも良かった

#### 【否定的内容】

- ・ 自治医大は教育のマンパワーと教育の場をもっと卒業生とその現場に任せてほしい。特定機能病院ではプライマリケア教育は不可能である。
- ・ 全寮制の6年間は不要、自分は3年間いた。
- ・ 栃木県は遠い
- ・ アルバイト（家庭教師）に行くために車が必要であるなど、地域環境が良くなかった
- ・ 周囲に何もない環境で、いわゆる大学生活としての社会との接点が薄かった
- ・ 各県によってかなり対応が違っており、私の県では後輩達は地元大学の中に入ってしまう人があった。徐々に卒業生としての団結がなくなった

#### 【その他】

- ・ 学生時代に妻に知り合った
- ・ 振り返ればよかったように思うが、卒後10年間くらいはかなり大変。同期の人も同じだと思うから続けられた
- ・ 栃木という小京都的な雰囲気のある所に薬師寺の近くで学べたというのは、何かの因縁だったのでしょうか。

## V 自治医科大学第1期生として

### 4)「自治医科大学を卒業して良かったこと」についての自由記載

#### 【生き方】

- ・1期生として学生時代も義務年限中もカリキュラム含め、いつも試行錯誤の繰り返しであったことが、自分を強くしてくれた
- ・1期生にとって用意されたルールは無く、全てが新しい試みであった。貴重な経験をさせていただきました。「僕の前に道はない、僕の後方に道は出来る」という気持ちでした。
- ・途中脱線しながらも、そのときそのときで努力すれば何とかかなると思えたこと。
- ・医師になれて、今まで医業に携わることができたこと
- ・医療とは無縁だった家庭において、医師に育ててくれたこと。
- ・それなりにうまく消化して良かった。ぜいたくをいえばきりありません。
- ・他の医科大学卒業では経験できないような多様な環境に巡り合えたこと。
- ・現在勤務する僻地で貢献でき、また僻地医療の一モデルを作ることができた。またネットの発達のおかげで全国に発信することができた。自己実現できました。
- ・無理やり苦勞をさせられたこと。(時が経つにつれ、よさがわかってきます。)
- ・もともと地元(へき地)での医療に関わりたいと思っていたので、へき地(地域)医療の医師を育成する大学が出来たのはタイムリーであった(現役では大学が存在せず1浪したため入学できたこともラッキー)。何よりも学費が免除されたことは大きかった。

#### 【教育・研修】

- ・中尾嘉久学長から卒業時に、「忘己利他」という色紙を全員頂きました。医師はとかく独断と偏見と高慢なプライドという過ちに陥りがちですが、常に軌道修正できたのはこのようなマインドを皆が共有していたからではないかと思っています。常に医師としての本旨「忘己利他」を忘れずに生きることが出来たのは、自治医科大学卒だからであり、何ものにも代えがたい素晴らしいことと思っています。
- ・学長を初め、若い教授の方々と精神的に近い距離で触れ合え、語り合えたことが財産となっている。
- ・医療の各分野のトップランナーの先生がたに、最先端医療、講義を受けられたこと。
- ・あの当時教育が充実していた。教授が熱心だった。
- ・教育の方々や事務職員や売店、寮の方もいい方ばかりでした。皆優秀すぎてついていけない辛さはありませんでしたが、同級生もいい人ばかりでした。人との出会いは最高でした。
- ・教員が素晴らしい。47都道府県であることも重要
- ・高久先生を始め、素晴らしい先生方の授業を受けられたこと。
- ・最先端の講義を受けていたことに感謝。卒業生が皆優等生で各所で活躍していて誇らしい
- ・外科ローテーション研修、僻地医療の経験、医療人としての基本を学べたこと
- ・皆のがんばりや業績に助けられました。母校のブランドが上昇してゆく渦中であって楽しかった
- ・専門外の研修ができたこと、救急処置等について広く学べたこと。卒後の仲間がたくさん増えていって、つながりもあること。ポストへき地のメリットが多
- ・有給で研修に出ることができた。

#### 【同窓生】

- ・素晴らしい同級生に恵まれ今日を迎えることができていること。
- ・後輩の顔をほとんど知っていること
- ・全国から集まった人と知己を得たこと
- ・良い仲間（同級生）ができた事
- ・活躍する卒業生が多く刺激を受けた。全国に知人ができた。他の都道府県に関心を持てた。学生が少なかったのので、多くの先生方と親しく話せたこと。
- ・日本全国に同級生がいること。友人・恩師に恵まれたこと。
- ・全寮生で大学が近かった。早期から臨床実習があり、充実していた。卒後も他大学に先駆け、いろんな科で研修を受けることができました。身分が研修中から保証されていました。
- ・同じ目的意識を持った同窓生と過ごせた

#### 【義務年限】

- ・義務年限のおかげで様々な問題に直面しても医師としての仕事を続けられた。
- ・義務年限は医師の人生としての Warm up 期間として非常に有意義でした。

#### 【大学のブランド】

- ・大学の独自性がプライドとなり、健康業界に関わっている。
- ・自治医科大卒業生ということで地域に溶け込みやすかった。
- ・卒後 42 年間、現在も社会に恥じない医師として働いている礎を作ってくれたことに感謝
- ・若い時に地域の首長さん達接することができ、いろいろな話をお聞きできたこと
- ・出身地の大学に進学していたら人生の幅は大変狭いものであったと思います。自治医に行って全国各地の同期生と接点を持つことが出来て、この上ない喜びです。
- ・地元の評価が高い。(自治医大卒医はみんな優秀と思われている。)

#### 【総合医】

- ・総合医としての使命感、知識、技術を身につけられたこと。地域及び関連職との協調性を保つ能力をつけられたこと
- ・総合医として現在も働いていること
- ・総合医療を実践できたこと
- ・医局制度のしがらみの影響を受けなかったこと。講師として仕事をする機会が多く、「講師紹介」で常に話題にのぼること。卒業生の活躍が、自身の評価に繋がること。

#### 【地域とのつながり】

- ・地域で必要とされる医師としての人間力、臨床能力について、生涯を通じて考察し追及することができた。現在も地域の「かかりつけ医」として多職種のスタッフと協働して診療できる幸せな立場にある。
- ・卒後、出身地へ帰り、最も医師の確保が困難であった仕事を長年にわたってできたこと
- ・ニーズの高いところでやりがいを持って働けた
- ・地域住民のために役立つこともあったのではと自負できること。

#### 【幅広い経験】

- ・幅広い知識や臨床能力は身についたとこと。
- ・「地域医療」「総合診療」等、古くから続いている分野に若い時期から経験できたこと

- ・地域の中で医師の原点”を身につけさせていただいたこと
- ・どんな患者でもためらいなく診療できる。
- ・行政機関に長く従事し、自治医大のネットワークを通じ、幅広い経験、多くの人脈を得ることができた。
- ・地域医療振興協会の同僚と仕事を一緒にする機会を得ることができた。
- ・短期間であるが、へき地勤務、保健所行政を経験し関わることもできた
- ・医師として幅広い知識や経験を身につけられ、今もそのような意欲を持っていること。
- ・臨床能力が身についたこと。行政と関わりが持てたこと。

## 5)「自治医科大学を卒業して良くなかったこと」についての自由記載

### 【特になし・ほとんどない】

- ・特になし（強いてあげれば外科修練の機会が限定されたことぐらいでしょうか）
- ・殆ど無い。一つあげるとすれば、留学が出来なかったことくらい。

### 【生き方】

- ・良くなかったと言えば自分を否定してしまうことになるので、「良くなかった」とは言えない。
- ・学生時代にもうすこしまじめに勉強しておけばよかった！
- ・卒後個人としての活動が多く、組織の一員（医局の一員など）としての行動を学んでいないこと。縛られないことは利点でもあったが、勝手なことをするとの批判もあった。
- ・自分の能力、意志からして自治医大のレベルにはついていけず、恥ずかしい思いや辛い思いをしました。まぐれで分不相応の大学に入学したと思っています。
- ・選択肢が狭い
- ・将来に対する選択が制限されていた。他大学卒業生が研究をしていても自由にできなかった。
- ・洗脳されすぎて、人生の自由度を失った。
- ・栃木の寮に閉じこもり、学生時代にもっと知るべき社会の仕組みに疎くなった
- ・お金で身柄を拘束されていたことに後で気がついたことがショック
- ・他大学の先輩 DR の一部に自治医科大学はいらないよと無視されたことかな
- ・先輩がいなく、医師間の信頼関係を築くのに時間がかかった

### 【教育・研修】

- ・3年目からの研修の不備、自治医科大学から遠距離
- ・研修する期間が短かったこと
- ・専門を伸ばしながら、地域での Do を加えてへき地に行きたかった。
- ・専門を伸ばせなかったこと（これはへき地で疲れてしまったこと。内地病院での当直回数で疲れてしまったことで開業しているので当然）
- ・他医学部出身者と比べて、専門性の取得が遅れる
- ・専門の選択肢が非常に少なかった。
- ・当県の場合、内科、外科、小児科、産婦人科以外は無理
- ・学位不要のように教育されたが、持たないことによりチャンスをなくしたかもしれない

### 【全寮制】

- ・6年間の全寮制（3年で寮を出た）。

### 【大学のブランド力】

- ・出身県に先輩がいないことで不安を感じることは多々ありました。当県は県立病院が多く存在しますが、地元医大の先生に「外様は良いポスト（院長等）にはなれないからあまり頑張らないほうがいいよ！」と云われたこと。
- ・他大学と比べて力がなかったこと
- ・卒業した当時は自治医科大学の認知度が低く、いちいち説明するのが面倒なことがあった位で、大きな問題はありませんでした。

- ・卒業して、都道府県格差や大学の格差がよく分かった。それに立ち向かう仕組みがない

**【地域とのつながり】**

- ・地元大学との関係の構築に年数がかかった。それまでは孤立感があった。
- ・卒業後数年は肩身の狭い思いや不安があったが、地域に出て自信が出来て来た。
- ・自治体（県）にビジョンが無かった

**【地域の環境】**

- ・自治医大から遠い私達は現地の地域医療で毎日一杯一杯で、とても上京できる環境にはなかった

**【その他】**

- ・強いてあげれば、留学が40才過ぎになったこと
- ・同級生に女性がもう数人いたら私の大学生活がもう少し変わっていたのではないか
- ・私はみなさんに大変ご迷惑をおかけしたので、良くなかったことといえば私自身かもしれません。
- ・近年、OBとして自治医大へ自由に訪問する機会が少なくなった
- ・地域に埋もれる以外の方法をとれなかった

## 6)「自治医科大学に伝えたいこと」についての自由記載

「自治医科大学に伝えたいこと」について、自由記載で回答を求めた。53人(59.6%)から回答が得られた。以下に代表的な記載内容を示した。

### 【建学の精神】

- ・各大学、各県に地域枠が創設されたが自治医大出身者の存在意義は必ずあると感じている。地域医療をになうという建学の精神を忘れずにいて欲しい
- ・このまま、ますます社会に貢献する人材を育ててください。
- ・人口減少で地域の維持すら難しくなっているが、医療は最後の砦。へき地にふみとどまる医者は必要。へき地医療マインドを持った医者はこれからも必要(一定数は)。へき地を経験し、その後各界で活躍してほしい。
- ・大学独自の立ち位置を変えことなく貫いていただきたい
- ・超高齢化が進む中、地域医療の充実、発展が益々求められています。自治医科大学には、わが国の地域医療の充実に向けて、一層のリーダーシップをとっていただきたい。
- ・簡単にはへき地はなくならないと思うが、志をもって仕事を続けていけば存在価値がある
- ・建学の精神を大事にしてください
- ・自治医科大学の理念が現在の大学1年生にもしっかり伝わっていることは素晴らしいこと。義務年限が終わるまでは契約ですので、縛られていても仕方ありませんが、その後は各人の特性に合った場で活躍出来れば良い。その応援や支援が(現在の大学については知らないのですが)受けられる体制が、以前の自治医科大学にはあったと思います。今の自治医科大学にもその余裕があれば良い。

### 【地域医療マインド】

- ・community based medicineの拠点として、今後も一層発展するよう願っています。
- ・これからも自治医大卒業生が希望をもって地域医療を続けられるように色々なサポートをお願いしたい。
- ・当県は卒業生のまとまりがよいという評価をいただいておりますが、一期生として大変嬉しく思っていますが、後輩の中には、我が道を行く者もあり、卒業生の評価を落としている事例もある。少なくとも義務年限内だけでも自治医大マインド、地域医療マインドを持って仕事ができる医師になるよう教育していただきたい(マインドを叩き込んでほしい、若いうちに！)
- ・義務年限の9年間を仕事をさせるという考えでなく、へき地でも働ける医師、総合診療医、専門医(サブスペシャリティをもつ)を養成する機関と考えた方がよい

### 【教育研修】

- ・1.教育の充実を続けてほしい、2.そのためにも研究も重要。できる教授陣を選考していくべきである。
- ・「教員のみなさん、是非ともへき地医療の現場に足を運んで下さい。」
- ・学生時代から地元のへき地医療に従事している先輩医師と交流する機会を増やすことが大切である
- ・今は世界中でエゴが蔓延し、犠牲の精神が失われている。自己犠牲が悪とまで言われるような社会になっている。医師のモラルが徐々に欠けていっているように思う。自治医大の地域医療マインドは、医師としての「本旨」に繋がる物だと私は信じています。ぜひ、教育の現場では、そのような道徳心や倫理観を育てて欲しい。
- ・世界に通用する人材育成のために海外との交流に一層深めてほしい。

- ・在学中にできるプラクティスを更に充実してほしい。へき地 Dr の代替派遣も大切。卒業後の Ws 単位でのブラッシュアップ研修（へき地のため、専門のため）
- ・自分が生活をしている地域で、最も必要とされている仕事をする医師を目指すことが、自分自身にとって、また地域の皆にとって大切であることを若手に教えてほしい。
- ・知識や技術も大切だが、学生の間は医師の基本である人間愛、忘己利他の精神を養える機会をできるだけ多く持って欲しい。
- ・多病な高齢者が増え、多様な人生観を持った人が多くなる。これから人間に総合的な視点で対応できる総合医の養成が必要
- ・地域で求められる「かかりつけ医」（家庭医、総合医）として仕事出来る優秀な臨床医を育てることに誇りを持って欲しい。19 番目の専門医「総合診療専門医」を卒前・卒後教育を通じて、今以上に多数養成する大学として生き残ってほしい。多彩な方面で活躍できる医師（研究、教育、臨床のスペシャリスト）集団であってほしいが、卒業生のうち概ね半数は総合診療専門医を目指してほしい。
- ・へき地の数も減少し、自治医大の使命にも変化が生じているような気がします。新しい使命を考える時でしょうか？
- ・時代に応じた地域医療の方向性を積極的に発信して欲しい。

#### 【その他】

- ・OBともう少し連携・活用して自治医大が発展することが期待される
- ・地域医療振興協会とのさらなる連携が望ましい
- ・大学学閥、関連病院の奪い合い。今後卒業生を取り巻く環境はさらに厳しくなる。使い捨てであってはいけない。
- ・気張らずに、一大学として頑張ってもらいたい。地元大学でも熱心に地域医療を行っている先生も多いです。
- ・義務年限ではない「医師としての修行」の年限であると痛感している。
- ・研究も重要だが、医療人としての資質を育ててほしい
- ・志のある若者を十分に伸ばしてあげてください
- ・卒業時の進路決定に大学側ももっと関与して欲しい。卒業時に都道府県間で希望する診療科のマッチングを行い、トレードが可能になるような正式なシステムが出来れば幸いです。
- ・時代の変化と共に、県の政策医療が短期で変更され、現在の若い卒業生（義務年限内）が進路選択に悩んでいる。当県では、義務年限内の「後期研修制度」が明文化されていないことが長年の課題である。大学から「後期研修」の制度化実現のために力を貸してほしい。
- ・将来に対する選択肢が増えると良いと思う。県をまたいでの支援やトレードなどが可能になればと思う。
- ・総合医療に接する人が出来て、大変嬉しく思っている。
- ・卒業生同士、恩師との関わりが強い大学はない。この「伝統」を今後も是非続けてもらいたい。
- ・現有スタッフは研究センターになり過ぎている。地元医師会はその点を嘆いている。
- ・自治医大の設立方針、教育方針など全国レベルの枠組にもかかわらず、現状として東大の植民地的状況がいまだに強い。教授選考は全国レベルの評価も必要。
- ・当初の教授陣のような熱意を持っておられるのかどうか心配。卒業生任せになっている。
- ・校歌の歌詞を「ともに進まん”医療”の道を」の”医療”の道を”医の道”に戻していただきたい



- ・今後百年、二百年、三百年と自治医科大学が不滅で存続してほしい。
- ・自治医科大学の教育を通じての medical literacy の付与を感謝する。個々の健康状態の説明から Covid-19 の病態解釈・対応法策定にも有効だった。意欲的に日々更新する医学知識は一生ものである。
- ・学生時代に経済と法の基礎知識に対する意欲を持って得られていたら……、の欲もある。
- ・社会情勢や医療を取り巻く環境が変わっても、医療の均霑化と社会構造の改革のために自治医科大学がやるべきことがある。
- ・専門医のキャリアを持って総合診療の現場で仕事をしてみたかった。
- ・卒業生はよくやってきてますよ。サポートが少なくても。
- ・地域枠医師の募集が増えてくると自治医大に学生が集まりにくくなりませんか。離島、へき地医療は特別でしょうか。離島、へき地医療のメディカルカレッジはどうですか。

## VII 「国・都道府県、地域医療振興協会に取り組んで欲しいこと」についての自由記載

### 【国・都道府県】

・現在の地域枠制度でなく、第二、第三の自治医大を作るか、地域枠に僻地などへの勤務を義務づけしてはどうか？ただし、後者ではその大学のマイナーな存在となり、学年一体として同じ方向に向かえる自治医大方式がベター

- ・優秀な医者が僻地で多勢仕事し、居つくこと
- ・都市部と僻地隔差（基本的な）を減らすこと
- ・公衆衛生部門のスペシャリストの養成。自治体の厚生部長が全部（これでは多様性がなさすぎですが）自治医大出身者もしくは自治医大と連携がとれる人にする
- ・県に対して今後地域医療、へき地医療をどうしたいのかという具体的なビジョンを示して欲しい。何年たってもビジョンが出てこない。義務年限を務めてくれたら「あとはご勝手に」という姿勢が続いている。
- ・義務年限内自治医大卒業生の派遣についてオープンな場での議論が望まれる
- ・公立病院改革の中で、集約化が叫ばれ、地方の国保病院の存続が窮地に立っている。効率化のみが追及される施策に対抗する理論と行動の発信を期待する。
- ・国、都道府県も地域医療振興協会も、公的病院施設偏重をそろそろ改めるべき

### 【自治医大】

- ・大学から県に強い要望または指示を出してほしい。県に依頼しても、変えることはほとんどできないということがわかった。（県担当者にはそのような決定権がない。）
- ・全ての医大で、やはり全人教育が必要
- ・地元の大学、公立病院に勤務してきましたが、常に地域医療の充実を目指してこれたのは、自治医大のDNAのお陰と思っています。

### 【地域医療振興協会】

- ・これからも自治医大、地域医療の発展に貢献していただきたい。
- ・地域医療振興協会の発展をお祈りします
- ・保健医療政策の提言機能の強化
- ・地元の行政に協会を知ってもらう努力を続けて、信頼できる組織と分かってもらえることが大切
- ・COVID-19で尾身先生が登場する機会が増えているため、JCHOと一色田にしている医師がいる。
- ・高久先生の一筆、感動しました。
- ・医療の谷間に灯をともし協会活動に期待します。へき地診療所や病院の運営のノウハウなど協会でも指導されると良いかと思えます。
- ・自治医大と地域医療振興協会の連携強化。大宮医療センターの利活用の拡大
- ・。協会のマンパワーで医師不足県に地域医療の拠点となるような病院を運営して欲しい。
- ・卒業生を支える協会の地道な活動が非常に大切になっている。関係者の協力、連携を得て息長く取り組んでいただきたい。
- ・地域医療振興協会はよく活動してきたと思いますが、会員が少ない県があるのはなぜですか。協会の病院や施設が少ない県で会員が増えないのでしょうか。

### 【その他】

- ・今のままで良い。学閥などの既存組織と張り合う力が無いとなかなか厳しい
- ・①近在病院の内科医・整形外科医の不足が厳しく、心不全、肺炎等の入院治療をしてもらえない（高齢者が多い）。股関節骨折等も入院治療が出来にくい。②Gyne、小児、精神科、心臓（MI等）、脳神経は今の方向でセンター化の充実が望ましい。③在宅医療の今後は非常にお金がかかることで、逆に入院、入所の方向に戻ったほうが良い。
- ・医療の格差は常に存在するので日のあたりにくいところに優秀な Dr は必要
- ・全国的に自治医大卒業生は医師会の活動という面では弱い。医師会を利用？してわれわれのマインドを普及させていくという方法も、もっと取り入れてもいいのでは。
- ・かかりつけ医として地域医療を担うため、行政、保健所 etc と連携し、他大学の卒業医師が嫌がる仕事も極力受け頑張っています。
- ・今はあらゆる職種に於いて、経済・経済とささやかれ、医療においても医は算術と化してしまいました。昔は「医は算術」というと、一笑に付された言葉が、今は当然のように思われています。私はそのことが不思議でなりません。しかし、結局の所、経営は人材なのです。良い医師が居れば、必ず評判を得て患者さんが集まってきます。地域医療をよくするためには良い医師（人間性と知識、技術）を育てる以外に道は無いと思います。ぜひ、そのような教育に全身全霊を込めて頂けたらと思う次第です。
- ・若いころより、海外留学をしたいと思っていました。やっと、50歳で留学できました。留学先での2年間とその後追加の3カ月は人生のうちで最も楽しい時期になりました。ただ学んだことをその後あまり生かせなかったことが残念。私のような思いをする人が一人でも減ればと思っています。
- ・若い人たちの声をしっかりとらえて進んで行って下さい。
- ・昭和60年夏に中尾喜久学長に来て頂き、夏季実習を行いました。その時右の揮毫を頂きました。「也仁而理医」（利尻の病院の院長室に現在もあります。）「医は理にして仁なり」とのことで、普通の「医は仁なり」ではなく。”理の上に”陣が求められると思います。その点を今後とも追及して行きたい。
- ・専門医等の資格を取得できるシステムが必要
- ・地域医療の基本は地域に住み地域住民となり、地域を知ることにある。近年、地域に住まず都市部からの通勤で地域医療に携わる者が増えてきているのが問題。
- ・地域医療の研究会などは、土曜日に開催されていることが多いが、コロナ明けは日曜日の開催を希望します。
- ・地域医療の本質は「患者・住民のかかえる問題を単純化せず、複雑なまま寄り添ってあいまいさに耐えながら診療・生活する」ことである。
- ・地元医師会の役員を約20年、会報編集長を24年間やっています。地元大学学生の研修受け入れも10年以上やっています。こういう活動も母校への恩返しと思っています。
- ・定年後、自治医大の恩師と一緒に働かせてもらっています。先生の診療姿勢（＝患者さんだけではなく、地域への思いなど）には感化を受けています。良き先輩、後輩、師と弟子のような関係が作れると良いと思います。来年度はまた出身県に戻りますが、体力と気力が自分なりに納得出来れば現役を続けるつもりです。
- ・忍の一字でした…。

## 【生き方】

- ・1期生として学生時代も義務年限中もカリキュラム含め、いつも試行錯誤の繰り返しであったことが、自分を強くしてくれた
- ・1期生にとって用意されたレールは無く、全てが新しい試みであった。貴重な経験をさせていただきました。「僕の前に道はない、僕の後方に道は出来る」という気持ちでした。
- ・途中脱線しながらも、そのときそのときで努力すれば何とかかなると思えたこと。
- ・医師になれて、今まで医業に携わることができたこと
- ・医療とは無縁だった家庭において、医師に育ててくれたこと。
- ・それなりにうまく消化して良かった。ぜいたくをいえばきりありません。
- ・他の医科大学卒業では経験できないような多様な環境に巡り合えたこと。
- ・現在勤務する僻地で貢献でき、また僻地医療の一モデルを作ることができた。またネットの発達のおかげで全国に発信することができた。自己実現できました。
- ・無理やり苦勞をさせられたこと。(時が経つにつれ、よさがわかってきます。)
- ・もともと地元(へき地)での医療に関わりたいと思っていたので、へき地(地域)医療の医師を育成する大学が出来たのはタイムリーであった(現役では大学が存在せず1浪したため入学できたこともラッキー)。何よりも学費が免除されたことは大きかった。

## 【教育・研修】

- ・中尾嘉久学長から卒業時に、「忘己利他」という色紙を全員頂きました。医師はとかく独断と偏見と高慢なプライドという過ちに陥りがちですが、常に軌道修正できたのはこのようなマインドを皆が共有していたからではないかと思っています。常に医師としての本旨「忘己利他」を忘れずに生きることが出来たのは、自治医科大学卒だからであり、何ものにも代えがたい素晴らしいことと思っています。
- ・学長を初め、若い教授の方々と精神的に近い距離で触れ合え、語り合えたことが財産となっている。
- ・医療の各分野のトップランナーの先生がたに、最先端医療、講義を受けられたこと。
- ・あの当時教育が充実していた。教授が熱心だった。
- ・教育の方々や事務職員や売店、寮の方もいい方ばかりでした。皆優秀すぎてついていけない辛さはありませんでしたが、同級生もいい人ばかりでした。人との出会いは最高でした。
- ・教員が素晴らしい。47都道府県であることも重要
- ・高久先生を始め、素晴らしい先生方の授業を受けられたこと。
- ・最先端の講義を受けていたことに感謝。卒業生が皆優等生で各所で活躍していて誇らしい
- ・外科ローテーション研修、僻地医療の経験、医療人としての基本を学べたこと
- ・皆のがんばりや業績に助けられました。母校のブランドが上昇してゆく渦中であって楽しかった
- ・専門外の研修ができたこと、救急処置等について広く学べたこと。卒後の仲間がたくさん増えていって、つながりもあること。ポストへき地のメリットが多
- ・有給で研修に出ることができた。

## 【同窓生】

- ・素晴らしい同級生に恵まれ今日を迎えることができていること。
- ・後輩の顔をほとんど知っていること

- ・全国から集まった人と知己を得たこと
- ・良い仲間（同級生）ができた事
- ・活躍する卒業生が多く刺激を受けた。全国に知人ができた。他の都道府県に関心を持てた。学生が少なかったので、多くの先生方と親しく話せたこと。
- ・日本全国に同級生がいること。友人・恩師に恵まれたこと。
- ・全寮生で大学が近かった。早期から臨床実習があり、充実していた。卒後も他大学に先駆け、いろんな科で研修を受けることができました。身分が研修中から保証されていました。
- ・同じ目的意識を持った同窓生と過ごせた

#### 【義務年限】

- ・義務年限のおかげで様々な問題に直面しても医師としての仕事を続けられた。
- ・義務年限は医師の人生としての Warm up 期間として非常に有意義でした。

#### 【大学のブランド力】

- ・大学の独自性がプライドとなり、健康業界に関わっている。
- ・自治医科大卒業生ということで地域に溶け込みやすかった。
- ・卒後 42 年間、現在も社会に恥じない医師として働いている礎を作ってくれたことに感謝
- ・若い時に地域の首長さん達接することができ、いろいろな話をお聞きできたこと
- ・出身地の大学に進学していたら人生の幅は大変狭いものであったと思います。自治医に行って全国各地の同期生と接点を持つことが出来て、この上ない喜びです。
- ・地元の評価が高い。(自治医大卒医はみんな優秀と思われている。)

#### 【総合医】

- ・総合医としての使命感、知識、技術を身につけられたこと。地域及び関連職との協調性を保つ能力をつけられたこと
- ・総合医として現在も働いていること
- ・総合医療を実践できたこと
- ・医局制度のしがらみの影響を受けなかったこと。講師として仕事をする機会が多く、「講師紹介」で常に話題にのぼること。卒業生の活躍が、自身の評価に繋がること。

#### 【地域とのつながり】

- ・地域で必要とされる医師としての人間力、臨床能力について、生涯を通じて考察し追及することができた。現在も地域の「かかりつけ医」として多職種のスタッフと協働して診療できる幸せな立場にある。
- ・卒後、出身地へ帰り、最も医師の確保が困難であった仕事を長年にわたってできたこと
- ・ニーズの高いところでやりがいを持って働けた
- ・地域住民のために役立つこともあったのではと自負できること。

#### 【幅広い経験】

- ・幅広い知識や臨床能力は身についたとこと。
- ・「地域医療」「総合診療」等、古くから続いている分野に若い時期から経験できたこと
- ・地域の中で医師の原点”を身につけさせていただいたこと
- ・どんな患者でもためらいなく診療できる。

- ・ 行政機関に長く従事し、自治医大のネットワークを通じ、幅広い経験、多くの人脈を得ることができた。
- ・ 地域医療振興協会の同僚と仕事を一緒にする機会を得ることができた。
- ・ 短期間であるが、へき地勤務、保健所行政を経験し関わることもできた
- ・ 医師として幅広い知識や経験を身につけられ、今もそのような意欲を持っていること。
- ・ 臨床能力が身についたこと。行政と関わりが持てたこと。